

第1分科会

協同の仕事おこしと経営

協同の事業・経営、資本形成、新しい法制

—第1分科会で何をめざすか—

中田 宗一郎（日本労働者協同組合連合会・専務理事）

労働者協同組合は、よい仕事、の追求を通じて、事業の考え方を「人と地域に役立つ仕事おこし、それを事業として継続し社会発展に役立つものに高める」としているが、これが協同による仕事おこしの理念として、儲け本位の事業・経営の考え方に對抗する普遍性をもつものといえる。

また、労働者が労働者のままで経営ができるはずだと運動・事業・経営の主人公となるとりくみを進めることを通じて、「全組合員経営」という画期的なキーワードをさぐりあてた意義は大きい。

時代が動く時、原理・原則をたて、愚直に進む活動がいかに大切で、教訓に富んでいるかということ、最近数年の推移は見事に教えてくれた。

バブルの崩壊、長く続く構造不況は、儲け本位の経済システムがあくなき利益追求としてリストラ、工場の海外移転、農産物自由化による農山村破壊などをひきおこし、これまでの資本主義経営の価値観が根底から崩れることを目前にすることで、まったく新たな経済システムと経営理念をかかげる協同組合や非営利組織の方向が、新たな意味をもって注目と期待を受けている。

これまで我々は、事業を経営することについて手本のないことから、既存の資本主義経営や、先輩協同組合の経営を学ぶことを通じて労協らしい経営を追求してきた。それは雇われる関係でない働く者が主人公となる経営であり、労働が資本を使う経営の追求であった。時代の変動は金儲け第一主義のあり方に対抗する方向として協同による経営を浮上させることとなった。今、彼等の論理や言葉、彼等の手法ではなく、労働を通じて成長し、人間の尊厳を追究できる仕事をおこすべき分野が地域に山積みされていることが実感できる。

それは大量生産と儲け主義にかわって、本当の意味で豊かな生活にむかう福祉サービス、農林水産業、環境を守る製品・システムなどであり、これらをやりとげる専門的経営力量を日本の労働者は潜在的に身につけており、すでにその先進部分は労協や新たな協同組合へ参加し始めている。

このようにみえてくると前回の全国協同集会で提起のあった、労協・協同組織の「民主的運営をどうはかるのか」「効率とは」「市場競争にかてるのか」「資本形成をどうするのか」等についての解明への切り口は鋭く、そして確固としたものになってきていることを確認できるだろう。

今回の協同集会の分科会では、このように発展してきている新たな方向としての「協同の仕事おこしと経営」について、以下のような実践報告と深めるべきテーマをたてて、実践家・専門家の提起をうけて討議を深めたいと考える。

【予定される実践報告】

- ①野寄雅博（センター事業団専務補佐）：事業の考え方、全組合員経営、資本形成
- ②石井光幸（パラマウント製靴共働社代表）：労協への発展、労協グループの役割
- ③山内京子（ワーカーズ・コレクティブ千葉県連合会会長）：ワーカーズの働き方を通して

【深めるべきテーマ】

- ①事業・経営の到達点、理念実現にむけた経営基盤の確立、および新たな挑戦課題は何か
- ②根源的な資本形成の課題、全組合員による資本形成と無借金経営、および自己金融制度の確立
- ③非営利組織としての規範と日本における実践
- ④労働者（生産）協同組合法の制定のとりくみ、法制研究の整理と今後の展望